

# 「保育内容（言葉）」のアクティブラーニング実践

## Active learning practice of “childcare content (word)”

原 田 大 樹  
Hiroki Harada

### 1 はじめに

本稿では、幼稚園教諭・保育士の免許資格取得のために必修とされている「保育内容（言葉）」で行った実践を検討していく。現在、授業のアクティブラーニング化が叫ばれ、大学における授業においてもアクティブラーニングを取り入れた授業の構築が目指されている。また、協同性も一つのキーワードに挙げられ、授業改善を図っていこうとしている。このような中で、「保育内容（言葉）」は、どのような授業を行うことで基礎的・基本的理論を抑え、保育に生きる実践力を養うことができるのであろうか。個人の思考と協同的な学習形態による意見交流、グループとしての判断力、表現力、これらの要素が、どのように授業内で展開されたのかを明らかにする。稿者が行った「保育内容（言葉）」の実践を取り上げ、考察を試みたい。

### 2 先行研究における「保育内容（言葉）」の実践

まず先行研究において、「保育内容（言葉）」が、どのように実践されているかを見ていく。

保育士養成課程・幼稚園教諭養成課程には、必ず、保育内容（言葉）のような科目が配置されており、日本全国で、多くの実践が行われていることは明らかである。しかし、実践論文・研究論文としてまとめられているものは数少ない。例えば、広渡純子、讃岐京子は、「保育者養成カリキュラムにおける科目間連携（1）―「保育内容言葉」と「保育表現技術」の連携―」において、領域「言葉」に関連する二つの科目の連携について実施状況を示し、今後の連携の在り方を探っ

ている。「保育内容言葉」の15回の内容は次のように実施されていることが報告されている。以下に簡略化した内容をまとめる。<sup>1</sup>

第1回	自己紹介、オリエンテーション
第2回	読み聞かせ、わらべうた、おはなし、領域「言葉」の目標
第3回	読み聞かせ、わらべうた、ストーリーテリング、領域「言葉」と他領域、小学校国語科との関係
第4回	読み聞かせ、わらべうた、乳幼児期の言語発達
第5回	読み聞かせ、わらべうた、乳幼児期の言語発達
第6回	読み聞かせ、わらべうた、乳幼児期の言語発達
第7回	読み聞かせ、わらべうた、乳児の言語発達と環境とのかかわり
第8回	読み聞かせ、わらべうた、幼児の言語発達と環境とのかかわり
第9回	読み聞かせ、わらべうた、言葉を育てる児童文化財
第10回	読み聞かせ、わらべうた、言葉遊び
第11回	お話を語る（素話）
第12回	道具を用いて語る
第13回	わらべうた、子どもと絵本（乳児）
第14回	わらべうた、子どもと絵本（幼児）絵本の基礎知識
第15回	ふりかえり、まとめ

上記の表を見ると、第10回まで、読み聞かせ、わらべうたが入っており、グループごとに発表の時間が設けられたことがわかる。実践力を身につけさせるという目標のもと行ったものであると考えられる。それ以外の内容はおおよそ、①幼稚園教育要領や保育所保育指針に示された「言葉」の目標・内容を捉える、(小学校との関連も含む)、②発達段階に分けた言語発達の諸相、③言語環境、④児童文化財、言葉遊びの4点に集約された内容であることがわかる。

井上範子は「保育内容一言葉」の研究授業を報告している。授業計画は、次の通りである。<sup>2</sup>

第1回	子育てと言葉（1）
第2回	同上（2）
第3回	領域「言葉」がめざしているもの
第4回	領域「言葉」と小学校「国語」との関係
第5回	言葉の獲得（1）
第6回	同上（2）
第7回	言葉を育てる環境（1）
第8回	同上（2）
第9回	同上（3）
第10回	同上（4）
第11回	言葉の育ちにかかわる諸問題（1）
第12回	同上（2）
第13回	言葉の感覚を磨くためのワークショップ（1）
第14回	同上（2）
第15回	期末試験

内容としては、先に挙げた①②③も含まれていることがわかる。井上は、学生の状況に関して、「「講義で学んだことを実習中に思い返し、実習で得たものを講義で思い出す」この連鎖をうまく学生の自発的な学びにつなげられたら今より確かな実践力として自身が持てるのではないか。」と述べており、大学での学びと実践現場での学びの関連づけを強調している。また、「自ら学ぼう、学びたいと思い実践できる学生を育てる」ことも今後の授業改善の課題として挙げている。

以上、二点の実践報告を挙げたが、授業内容は、近

しいものであることがわかる。他学における同様の授業のシラバスを見ても、おおよそ同様の内容を含みながら授業を展開している。先行研究としては、他にも、神戸洋子<sup>3</sup>(2015)、清藤亜都子<sup>4</sup>(2013)らのものがある。

鈴木貴志(2016)は、絵本ビブリオバトルの実践を行い、次のようにまとめている。

こうした言語表現を重視した道徳的な絵本に惹かれ、保育における読み聞かせに取り入れていきたいという傾向は「いのちをまなぶキャンパス」を掲げる本学の学生にとって相応しい選択であるともいえる。しかし、保育者を目指す学生が注意すべき点は、国語教科書と同様の視点で言語を重点化して絵本選択を行うことであり、文学教材としての絵本の読み聞かせに陥ることである。いうまでもなく国語教材における絵本には国語教材としての使命があり、それ自体は否定されるものではない。しかし、繰り返しになるが、保育における絵本は、文章と挿絵という二つのメディアが同じ比重で成り立っている。つまり、文学教材としての絵本の読み聞かせの弊害とは絵本の持つ文章と挿絵の連関を断ち切り、原作の絵本とは異なる時間と空間が形成されていくことである。<sup>5</sup>

鈴木は、学生に絵本選択をさせ、ビブリオバトルを行わせた。そして、その結果、最も票を集めたのが、小学校国語科の教材にも採択されている「ずうっと、ずうっと、大すきだよ」であった。その結果から以上のように言語表現を重視した絵本を選択する傾向があることを指摘した。

このように、保育内容（言葉）の授業では、乳幼児期の言語発達や子どもを取り巻く言語環境、子どもと言葉の関係性などが授業内容として盛り込まれていることが分かる。あくまでも、シラバス、実践論文・研究論文によって、文字化された授業内容の把握であり、実際に授業参観をしたわけではないため、どのような授業展開になっているかは不明である。また、課題として、学生の学びをさらによりものにしたいという願いは、どの実践者も感じていることであろう。また、鈴木が指摘するように、言語表現重視という傾向

もみられる。これらの先行研究に鑑みて、学生が「自分事<sup>6</sup>」として捉えられるような内容の精査、基礎的・基本的・専門的な知識技能の習得を行うための授業内容を考えることが必要となる。

### 3 「保育内容（言葉）」のシラバスと授業の実際

第1回	オリエンテーション、「言葉」とは何か
第2回	保育と言葉
第3回	乳児の言葉の発達
第4回	幼児の言葉の発達
第5回	児童の言葉の発達
第6回	遊びにおける言葉とその役割
第7回	保育所保育指針と幼稚園教育要領における言葉①～領域「言葉」でめざされているもの～
第8回	保育所保育指針と幼稚園教育要領における言葉②～他領域との関係性について～
第9回	絵本（物語）と言葉①～絵本における諸要素～
第10回	絵本（物語）と言葉②～絵本分析～
第11回	絵本（物語）と言葉③～読み聞かせの手法と効果～
第12回	指導案・保育案の作成①～実態の見方～
第13回	指導案・保育案の作成②～書き方～
第14回	保育の進め方～「言葉」に着目して～
第15回	まとめ

次に、年度当初に計画していたシラバスと学習者の実態に合わせた変更点とを確認する。

左に示しているのは、年度当初に作成したシラバスにおける授業計画である。当初の計画では、第9回～第11回「絵本（物語）とことば」において、絵本世界で用いられる表現と絵本世界が子どもたちにどのような影響をもたらすのか、また絵本の読み聞かせの効果、方法などについて触れる予定であった。しかし、これまで実習に出た学生たちの反省の中で、「どの年齢の

子どもたちに、どのようなことばを用いていいのかが分からない」といった課題がみられ、今年度の受講者の中にも同様の疑問があった。そこで、当初予定していた内容から変更し、「絵本から学ぶ子どものことば」として授業を再構成した。なお、本学では、後期に「保育表現技術（言語表現）」という科目があり、絵本等に触れ、分析していく科目があるため、そちらで実施することとした。授業内容を再構成し、実際に実施した「保育内容（言葉）」は次のようなものである。

第1回	オリエンテーション、「言葉」とは何か
第2回	保育と言葉
第3回	乳児期の言葉の発達
第4回	幼児期の言葉の発達
第5回	児童期の言葉の発達
第6回	絵本で用いられる言葉について～対象年齢と使用語彙～
第7回	絵本で用いられる言葉について～対象年齢のない絵本の場合～
第8回	紙芝居の発表①
第9回	紙芝居の発表②
第10回	発達段階と言葉
第11回	保育所保育指針と幼稚園教育要領における言葉①～領域「言葉」で目指されているもの～
第12回	保育所保育指針と幼稚園教育要領における言葉②～他領域との関係性について～
第13回	保育案の書き方
第14回	保育案作成
第15回	まとめ

このように、本講義では、受講している学生たちの疑問点・課題点に鑑みて変更を加えた。主たる変更点としては、第6回以降の講義をアクティブラーニング化することによって、学生たちが課題と感じている点、とりわけ「年齢による言葉の違い」に答えを求めているという点に活路を見出そうとした。その内容としては、子どもたちの言語発達を考えながら、年齢にあったことばを選択し、物語を作成していくというものである。詳細は次項において示す。

#### 4 「保育内容（言葉）」におけるアクティブラーニング実践

では、本講義で、どのようにアクティブラーニング化を図り、実践したのかを紹介する。本稿では、学習者に合わせて変更した第6～9回の「紙芝居作成」について見ていく。

第6回では、対象年齢が明記されている絵本を用い、どのような言葉が使用されているのかをグループで調べさせた。また、その際、文量や挿絵の配色、物語の内容面にも着目させ、気づきをグループ内で共有する活動をさせた。

第7回では、対象年齢が明記されていない絵本を選択し、使用語彙や文量、配色など様々な視点を根拠にしながら、第6回の調査内容と照合して、絵本の対象年齢を推測させた。

第7回と第8回の間で、各グループで対象年齢を決め、紙芝居を作成させた。その際、第6、7回の調査結果を指標にさせた。作成した紙芝居は第8回、第9回において発表させた。

このように、第6回～9回において、「子どもたちの発達に合わせたことば選び」ということに主眼を置いた。子どもたちと一言にいっても、年齢や月齢など様々な発達段階があり、この年齢の子どもたちにはこのようなことばを使用すればよいという「答え」は明確に示すことができるものではない。そこで、数多ある絵本にその根拠と示唆を得ることにした。絵本には、対象年齢が示されている絵本もあれば、そうでないものがある。まずは、対象年齢が示されている絵本を選択させ、そこで使用されている特徴的なことばを拾っていった。そうして、おおよそ3歳用、4歳用、5歳用と分類させ、それを基に、対象年齢が示されていない絵本の対象年齢はどのくらいかという推測を行った。絵本の対象年齢の推測に用いた指標は、先に述べた対象年齢が示されているものとの比較が中心となった。また、年齢を推測していく手がかりとして、前時までに行った講義の中で紹介した余郷裕次による『絵本のひみつ』も使用した。

文量、配色、絵のタッチ、使用語彙、登場人物の行動、心情、立ち位置、メッセージ性等、多角的な視点から対象年齢を定めていった。しかし、この対象年齢

も明確な「答え」ではない。重要視したのは、「実感」としての対象年齢であった。このような調べるという学びを通して、他者に「答え」を求めるのではなく、絵本の中の言葉と向き合いながら、自ら「答え」を導き出そうとしたのである。

さて、絵本調査において、どの年齢の子どもたちに、どのようなことばを用いているという一応の「答え」を見出した後に、紙芝居の制作に取り組んだ。

紙芝居の制作において、ルールを定めた。以下のようなものである。

- ・対象年齢を決める。
- ・メッセージ性をもたせた内容を考える。

このような授業の後に、紙芝居の作成を課題として出した。二週間ほどの作成期間の後に、完成された紙芝居を読み聞かせる授業を行った。提出された紙芝居には、次ページのようなものがみられた。紙面の都合上、数例のみ示すこととする。

なお、分析の観点として、余郷裕次の絵本の秘密を用いる。余郷は、絵本の秘密として、大きく次の3点を挙げている。①まるい大きな正面顔、②主人公の立ち位置、③色彩の秘密である。①まるい大きな正面顔とは、「絵本の主人公は、多くの場合まるい大きな顔の持ち主です。」と述べ、ベビーシユマの機能を果たしていると指摘する。②主人公の立ち位置では、「画面の左側（左上）が、人間の視点の基点であり、左上にある顔に注目しやすいのです。」と説明されている。③色彩の秘密として、「赤が中心的存在として用いられることが多くあります。」と述べている。

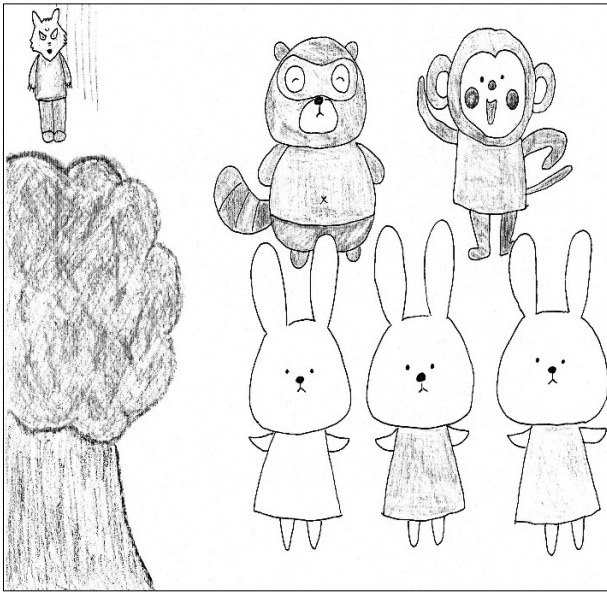
なお、絵本と紙芝居とでは、本来、機能が異なっているものであるが、物語とともにある挿絵という観点から、余郷の3点に、言葉の変換という視点を加え、以下学生の制作物を4点から検討する。

学生の一つのグループが5歳児を対象に制作したのは、「うさぎとオオカミ」という作品である。物語の概要は以下のようなものである。

おおかみは、その風貌から、村の住人である動物たちに仲間外れにされていた。一方で、うさぎの三姉妹は、人気があった。あるとき、村の畑が荒らされていたり、盗みがあったりした。うさぎの三姉妹は、「オオカミがしているところを見た」と村中に言う。また、別の日、村長である鳥がけがをしてしまう。オオカミ

は村長を助けた。村長は「オオカミは実はいいやつかもしれない」と思う。また、別な日にうさぎたちは、村にいたずらをしており、それを村長が見てしまう。うさぎ三姉妹のいたずらやオオカミがしたという嘘がばれてしまい、村の住人達から仲間はずれにあってしまう。しかし、オオカミは、「仲間外れはよくないよ。悲しいことだよ。みんなで仲良くしようよ。」といい、うさぎ三姉妹も更生し、仲良く暮らしていく。

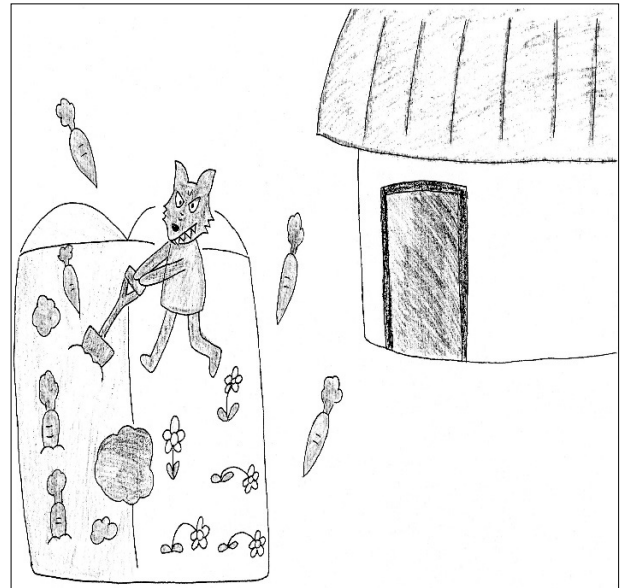
① まるい大きな正面顔



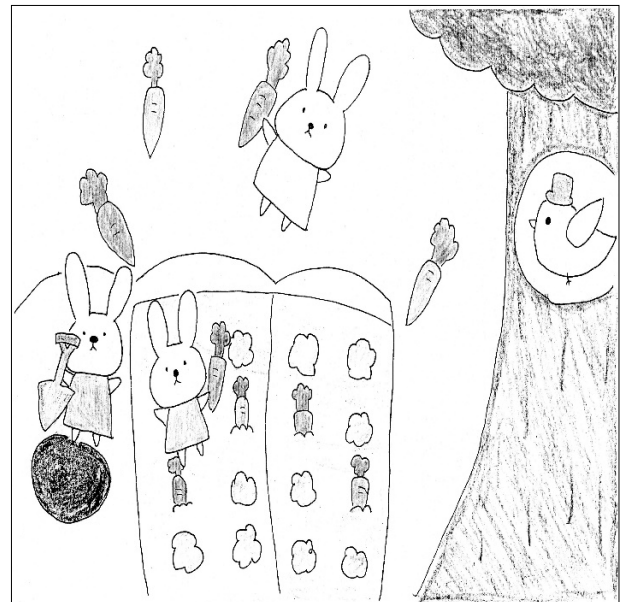
主人公は、うさぎ、オオカミのどちらでもあるが、うさぎ三姉妹の栄衰が物語の中心となっている。主人公は、うさぎ三姉妹という視点から見ると、うさぎと、村の住人たちは、まるい大きな顔で描かれ、顔と体の比重は1:1で描かれている。

② 主人公の立ち位置

主人公のひとりであるオオカミの描かれ方であるが、オオカミが左に配置されている。この場面は、うさぎが付いた嘘を描いているものである。



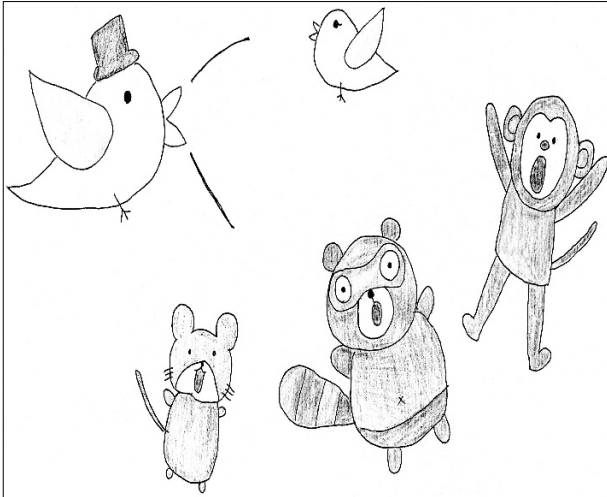
③ 色彩の秘密



この場面では、うさぎ三姉妹が、畑を荒らしている場面である。赤いニンジン、右端にある大きな木は、赤に近い茶色で描かれている。

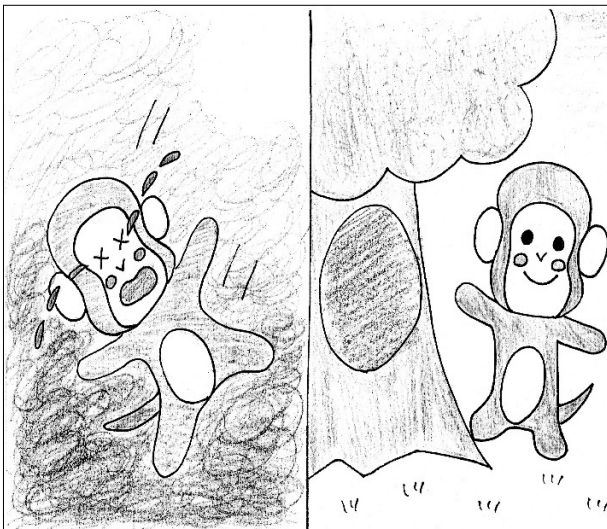
④ 言葉の変換

ここでは、言葉が変換されている部分がある。「それと同時に」ということばを「そして」、「後悔しました」を「残念に思いました」である。後悔という言葉は、対象年齢に定めた5歳には難しい言葉であるため、「残念に思いました」と改めている。



次の日、村長は、動物達が遊んでいるところにやってきました。そこで村長は動物達に言いました。  
「みなさん、聞きましょう。この村でいたずらをして、いたのは、狼ではなく、あの三姉妹のようだったんだ。」と言いました。村長は、昨日畑で三姉妹のうさぎがいたずらをして、いたことを話したり、また、けがをした時に狼が助けてくれたことを話しました。動物達は驚きました。それから、狼を仲間外れにしたことを後悔しました。残念に思いました。今からみんな、狼に謝りに行こう。と動物達が言い、狼に謝りに行きました。  
本日は心優しい狼はみんなのことを許し、その日から狼もいれて一緒に遊ぶようになりました。

以上のように、学生は、絵本の秘密について、実際に絵本から学び、紙芝居制作に生かしていることがわかる。また、別なグループでは、絵本からの学びを紙芝居に生かす段階で、次のように紙芝居特有の技法を用いることも行っている。



半分だけめくるといった技法である。

このように、当初本実践でねらいとしていた、発達段階にあったことば選び、ことばの指標づくりだけではなく、挿絵の効果、紙芝居特有の技法を織り交ぜながら学びを展開していったことがわかる。

## 5 考察

このように紙芝居の制作によって、絵本に使用されている語彙を指標にして、対象とする年齢の子どもたちに適切だと思われる語彙を選択しながら作品を完成させている。これまで実習に出た学生たちの反省の中で、どの年齢の子どもたちに、どのようなことばを用いていいのかが分からないなどの理論上説明の難しいものがあつた。もちろん、この年齢の子どもたちには、このことばを使用すればよいという明確な「答え」はない。また、本実践における使用語彙とは、あくまでも作品上の言葉であり、日常生活で使われる言葉とは異なる面がある。しかし、学生たちは、「何か」を指標として、推測して言葉を選択し使用することを学んでいる。実際の保育現場に立つ際も、子どもたちの生の言葉を聞き、それを教師が指標として、言葉を選択・使用していく姿が想像できる。そのような点において、「答え」を求めがちな世界において、自ら活路を見出していく姿勢が身についたと思われる。

また、発達による言葉の差異という点に関して、絵本の調査によってある程度の感覚をつかみ、それを指標として、設定した年齢の子どもたちに合わせるために考えるという思考活動が展開できた。それは、アクティブラーニング化された授業であつたからであると考えられる。つまり、講義形式の授業だけでは、学生たちは知識の受容者にしかならないが、本実践のようなアクティブラーニングを取り入れることで、「言葉」に対して主体的に思考し、また、協同性が担保された環境の中で、自らの思考を交流し、作品を完成させることで、子どもの言葉についての理解が深まったのではないかと考えられる。

## 6 おわりに

本稿では、「保育内容（言葉）」のアクティブラーニ

ング化の実践を試みた。活動を促していくという指導方法に目が向きがちであるが、「何を学ばせるのか」という指導内容の重要性がわかる。それが、本実践においては、子どもの言葉であった。また、様々な活動に際して、個々人の思考の重要性も再確認できる。このように、個人の知識体系が、知的活動の中でどのように活かされるのか、それは、アクティブラーニングと言われる指導方法の中に、知識がどのように位置付けられるのかということである。新たな知識を活かして活動へと展開させるのか、活動を行う中で新たな知識体系を学んでいくのか、本実践では、後者であったように思われる。その知識体系は、本実践では、子どもの「言葉」に対する個々人の「答え」である。ある観点をもって調べるという行為を経て、各個人の中に形成された「答え」をもって、グループという集団で、交流を行う。意見交換や「答え」の交流をするだけでなく、それらを用いて、言葉を選択しながら、紙芝居を作成した。その活動には協同性が存在し、

今後の課題として、個々人の思考が協同的な学習において、どのように活かされているのか、また、どの

ように変容していくのかについての詳細な検討が挙げられる。

## 注

- 1 広渡純子、讃岐京子（2012）「保育者養成カリキュラムにおける科目間連携（1）―「保育内容言葉」と「保育表現技術」の連携―」、『聖和論集』pp.69～78
- 2 井上範子（2010）「研究授業「保育内容―言葉―」の実施報告」、『高松短期大学研究紀要』54―55号、pp.351～375
- 3 神戸洋子（2015）「伝統的な言語文化を小学校教育・幼児教育の接続期に―「国語」と「保育内容（言葉）」の接続を中心―」、『帝京科学大学紀要』vol11、pp.101～108
- 4 清藤亜都子（2013）「保育者養成課程学生における言語表現の現状と課題―「保育内容演習（言葉）」の授業アンケートをもとにして―」、『名古屋女子大学紀要』59号、pp.315～319
- 5 鈴木貴志（2016）「保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題―保育者養成課程における絵本レビューバトルの実践から―」、『帝京科学大学紀要』vol12、p.153
- 6 木村光男（2013）「「自分事」で築く関係性」、『学習研究』466号、奈良女子大学 pp.36～41